

P G C

Powerboat Graphic Catalogue

パワーボートグラフィックカタログ

少年時代に誰もが一度は憧れた、
おもちゃ箱の中には、
そして今、目の前にあるそれは、
大人になった今でも遊び心を刺激する。

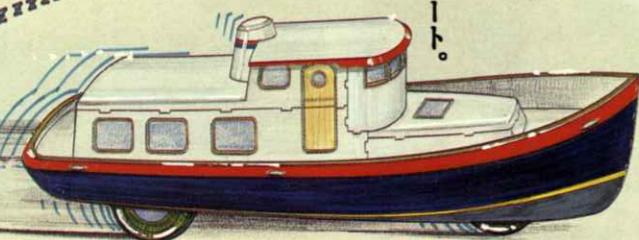


illustration by K.Yamamoto

レポート○山本琴治

Report by K.Yamamoto

写真○岡本 甫

Photo by H.Okamoto

このボートに初めて出会ったのに懐かしさを感じたのは何故だろう。私は漁師町に生まれそして海の豊かな幸運によって成長した。その私の記憶の中には、昔ながらの漁師船のような「無骨なたち」はあるが、このINFINI 41・クラシック・タグ・ボートのような「いいかたち」の船はなかった。それでもこのボートは私の忘れかけた幼少の頃へのノスタルジーを感じさせてやまない。一口で言えば「限りなく愛しい」という気持ちになるのだ。私の父が海に出て魚を取る。海は決して逆らわないと物言わざして教えられたあの頃。この41クラシック・タグは速くもないし、戦闘的でもないが、いざ海に出てみるとそののんびりと過ぎゆく景色、押しのける波の音までが聞こえてきて言い知れない安堵感を覚えた。父の船もやはりそうであったのだ。私が幼い頃はまだSLが走っていて、一度だけ乗った覚えがある。トンネルに入ると窓を閉めた。アトムを読みながらマーブルチョコを食べたり冷凍みかんも食べた。傍にいたのはやは

INFINI 41 CLASSIC TUG BOAT



堺港入口運河でのカット。バックは公演になっているが、やはりこの船がベストマッチ

P G C

Powerboat Graphic Catalogue

パワーボートグラフィックカタログ

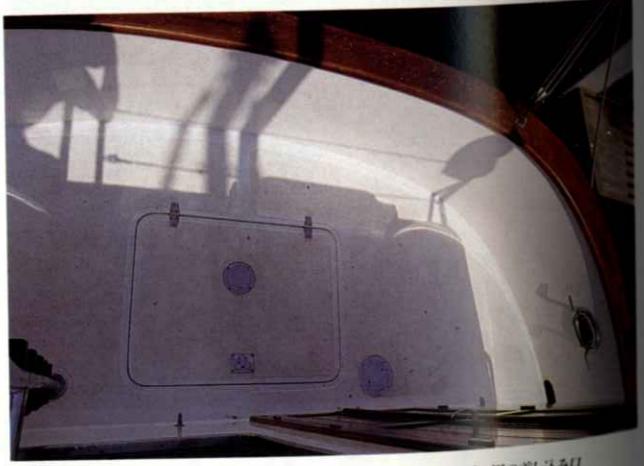
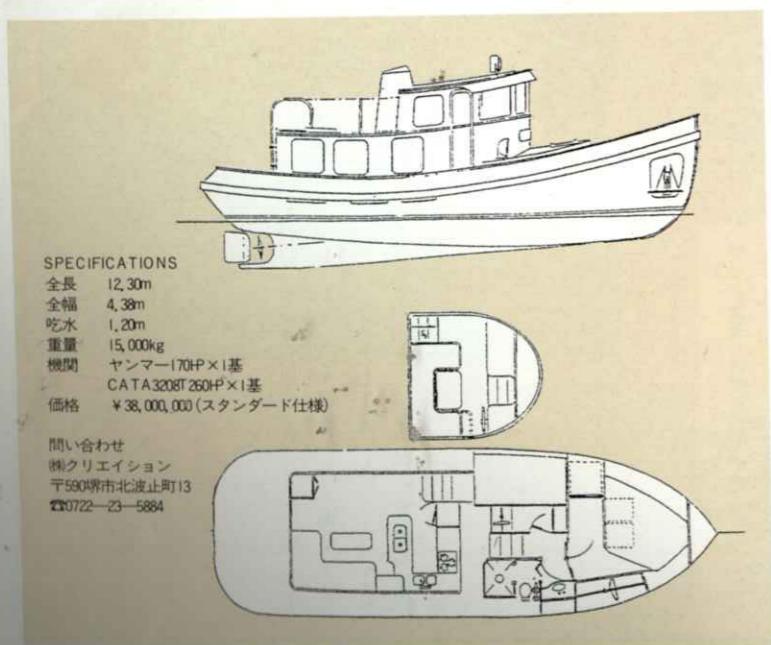


▲ギャレーは、時間と空間を割いてゆったりクルージングを楽しむといったコンセプトに合ったように必要となるものはすべてあるし、ファミリーでも気の合ったグループなど多人数でも十分使える内容だ。大型冷蔵庫X1、大型冷凍庫X1、スライド食器カゴX1、3Dコンロなど

▼エンジンは CATA の3208T で、260PS × 2800rpm が1基である。スタンダードはヤンマーの170PS × 1ということだった



▶広いメインサロンもやはりこの41クラシック・タグの特徴。冷房装置がないのが残念だが、クリエイションさんによる対応のつもりはあるとのことだ



アフトデッキ全景。デッキ中央に見えるインスペクションカバーは船急ラダー用の差し込み口

INFINI 41 CLASSIC TUG BOAT

り父であった。そんな事を思い出しながら41クラシック・タグを走らせていた。

このボートが造られたのは遠い海の向こうの台湾。これを画面に書き起こした人も造つたところも私達の育つた環境とは全く違うのに、ボートの持つ印象は万国共通しているに違いない。たとえ外海に出ても優しい海の神が守つてくれそうな気になる。あなたの行きたいところへゆっくりと行きなさい。だが、もし私がこの41クラシック・タグのオーナーであったなら、やはりヨーロッパの運河を廻行して、各地のワインめぐりでもやってみたいと思う。そんな勝手な思いをめぐらしながらの本当にリラックスした取材であった。

これから先、どこかの係留場所でこの41クラシック・タグを見かけたら、一体どんな人がこのフネのオーナーなのか見とどけたいものである。ヒゲをたくわえて優しく微笑む初老の船長さんを想像するのは、私のセンチメンタルジーだけではないと思う。■



純粋な走りだが、新しいボートライフのスタイルを作り出すような風格を感じさせる



バックスタイルはよりロー・プロフィールに見える。
都会の喧騒をよそにひねりたたぎの感で走り出していく



重厚感のある重量感



コンソールテーブル回り。やはりクラシカルなコンパスとラットカーペットが並んでいて、メーカーの気配りが感じられる



ホイールハウスフロントの形状やエンタランスドア、INFINI のエンブレム、どれをとってもこの雰囲気をかもし出す“役者”となっていて親近感を覚える



操作席とゲストソファ。このような配置もこの41クラシック・タグならではのもので、停泊中でも走航中でもゆったりと過ぎゆく景色を見ながらの寝心地格別であろう